

唯心思想を盛つた般舟三昧經の一節について

桜部

建

・色処・無想(色)処なり。この

三処は、意の為すところなるのみ。我が念するところをば即ち耳。我所念即見。

心作仏、心自見。

心是仏、心是怛薩阿竭。心是我身。心見仏。心

不自知心、心不自見心。心有想為癡、心無想是泥洹。是法無可

樂者、皆念所為べき者無く、みな念の為す所なり。(10)たとい念するも空なるの

一

行者が三昧の中にあって仏を観じ三昧より立ちいでたのちその境地を語る般舟三昧經の一節は、甚だ著名である。

まず、般舟經諸本の中でも基本となるものと見るべき支婁迦讖訳三卷本『般舟三昧經』(大四一八)によつて、その本文(行品第二、大正一三・九〇五C 29—九〇六a 11)を掲げる。

作是念：仏從何

是の念を作さく：(1)仏は何所よ所來、我為到何

所？ 自念：仏れると為す？ 自ら念ずらく：

無所從來、我亦無所至。自念：亦至れるところ無く、我

三處、欲處・色ら念ずらく：(2)三處あり。欲處

りか來たれる、我は何所にか到

れるか？ 自ら念ずらく：

佛は從來するところ無く、我

も無所至。自念：亦至れるところ無し、と。自

ら念ずらく：(2)三處あり。欲處

設使念、為空耳。

1 (桜部)

設有念者亦了無

所有。

如是、毘陀和、

菩薩在三昧中立

者、所見如是。

仏爾時頌偈曰、

心者不知心

有心不見心

心起想則癡

無想是泥洹

是法無堅固

常立在於念

以解見空者

一切無想念

一卷本『仏說般舟三昧經』(大四一七)と三卷本とは嘗つて

論じた『仏教研究論集』、昭和五〇年、一七三一一八〇ページ。

「同朋仏教」第一二号、昭和五三年、一二七一一三八ページ)ご

とき関係にあるから、この部分においても一卷本は三卷本

と内容的には全く同一であるといつてよい。したがつてこ

こに挙げ示す要はないが、ただ、一卷本文に「心是仏心

仏、心我身」(大正一三・八九九²⁹)とある中の仏心の二字は

み。もし念有るも亦所有なきを

了す、と。

かくの如く、毘陀和よ、菩薩が三

昧中に在るより立たば、見る所

かくの如し。仏、そのとき偈を

頌して曰わく、

(7) 心は心を知らず。

心有りて心を見ず。

(8) 心、想を起せば則ち癡なり。

想無くば是れ泥洹なり。

(9) この法堅固なる無く、

常に立つこと念に在り。

(10) 解を以つて空を見る者は

一切、想念無し。

一卷本『大方等大集經賢護分』(大四一六)では思惟品第一の終

り(大正一三・八七七^{b1}—9)に当たる。

即復思惟：(1)今此仏者從何所來、而我是身復從何出？

觀彼如來竟無來處、及以去處。我身亦爾。「本無出趣、

豈有転起。」彼復應作如是思惟：(2)今此三界唯心有。何

以故？隨彼心念還自見心。(3)今我從心見仏、我心作仏。

(4) 我心是仏、我心是如來。(5) 我心是我身。(6) 我心見仏。

重複と見て除くべきであろう。
次に、他の諸本の相当部分を順次挙げて、比較して見る
こととする。

『拔跛菩薩經』(大四一九)では(大正一三・九二三^{c29}—九
二三^a—7)、

(1) 是諸仏從何來、我到何所？是皆無從來、知如來無從

去。「云其自身其復生意爾。」(2) 但意行是三界耳。「我欲

觀天、意即見天。」(3) 以意作仏、亦以意見。但是我意。

(4) 為仏如來但意耳、(5) 及我身意也。(6) 以意見仏。(7) 意不

能見意、意不能知意。(8) 意想為無智、不想意為泥洹。(9)

是法無堅、皆從自可起。(10) 自可悉空、求自可亦無有、

とある。

亦空。

『大智度論』(大一五〇九)卷三十一(大正一一五・一七六七一)

に引くところの「般舟三昧(經)」では、

従三昧起、作是念言：(1)仏從何所來、我身亦不(一)去？
即時便知、諸仏無所從來、我亦無所去。復作是念：(2)三
界所有皆心所作。何以故？隨心所念悉皆得見。(3)以心
見仏、以心作仏。(4)心即是仏。(5)心即我身。(7)心不自知、
亦不自見。(8)若取心相、悉皆無智、心亦虛誑皆從無明出。
(10)因是心相即入諸法實相、所謂常空、

という。

チベット大藏經中の『現在諸仏現前住立三昧經』(OKC
八〇一)では第三章の終り(Harrison ed., *Studia Philologica
Buddnica Monograph Series I*, pp. 36-38)に当る。

(1)この如來はいすこから來たのか、私はいすこに行つた
のか、と考える。考えて、かれ(三昧行者)は、この如
來はいすこから來たのでもない、と知る。かれ自身も亦
いすこへ行つたのでもない、と知つて、かれは(2)この三
界に屬するものはただ心のみ(cittamatra)である、と考
える。それは何ゆえであるかといえば、すなわち、私が
分別する"ことにそ(の分別)"のままにそれら(三界の諸
法)は現われる(からである)。「この心は内にも、外に

も、両者(内・外)のほかにあ、といふえられない。」(9)(法
は、心が)誤つてとらえることに依つて生ずるのである。
(依つて生ずる、すなわち)縁起する(法)は自体がな
い(avastuka)。自体がないものは不生である。(10)不生な
るものは(実には)とらえられない(anupalabha)。と
らえられないものはその体が空である。その体が空なる
ものは施設されない。施設されないものは見られず、知
られず、執せられず、説示せられず、滅せしめられず、知
開示され得ない。そして、そのとき世尊はこれらの偈を
説かれた。

- (3)心によつて仏は生ずるし、
心によつてこそ、また(仏は)見られる。
(4)私にとって心こそが仏であり、
心こそが如來である。(1)
(5)心こそが私の身体であり、
(6)仏は心によつて見られる。
「心こそ私のさとり(bodhi)であり、
心は實に自性をもたん。」(2)
(7)心は心を知らないし、
(8)心において想あるは無知であり、

心において想なきは涅槃である。(3)

(9) 「これら諸法は実質なく (asāra)」
すべては (謂ひて) 在りとする想念より生ずる。

(10) (諸法の) 空であることからして、(それを謂ひて)
在りとする者

誤った想念なるものは、(11)において、空である。(4)

* M. Harrison の見解によれば、(11)の原文は nobhayam antarenopalabhyate やあひて (Cf. Kāsyapaparivarta p. 143)、本来「両者(内・外)の中間にゅ(在り)」と了解され、の意であらうが、チベット語訳者はそれを「両者のほかにも(在り)ぬ」の意にとつて記出したものと推測される。

II

右の中、(1)* については鳩摩羅什訳『悲華經』(大六五七)卷十(天正一六・二〇四^a12, 13)の「爾時作是思惟：如是諸仏從何所來，我何所至？ 即知，諸仏及以己身無所從來亦無所至」(チベット語訳の相当文は影印北京版二八卷、111111—1—7、八に見える)といふ記述や同じ卷(二〇四^a1—4)の「菩薩緣是仏像，而作是念：是像從何所來，我何處趣？」即知，仏像無所從來，我無所至。菩薩爾時作是念言：一切諸法亦復如是。無所從來，去無所至」(チベット語訳相当文

は111111—4 | 1112見える) という記述が、思い合わされる。

(2) についでは、上掲のチベット語訳に見えると全く同じ句が『十地經』に現われて広く知られている。「(11)界に屬するものはただ心のみである (cittamātram idam yad imam traibhātukam, Rabder ed. p. 49)。」『華嚴經』

十地品に「(11)界所有、唯是一心(実叉難陀訳、大正一〇・一九四^a14)」「(11)界虛妄、但是〔1〕心作(仏陀跋陀羅訳、大正九・五五八^a10)」とあるのがそれであり、続いて「また如

来によって分別して解説されたこれら十一の有支なるものもすくべて實に心に依るのである(yāny apimāni dvādaśabhabhāvāṅgāni tathāgatena prabhedaśa vyākhyātāni tāny api sarvāny eva cittasamāśritāni)」「如來於此分別演說十一有支皆依一心」「十一縁分是皆依心」の句が置かれ、そのあとに同じ趣意が偈頌の形で繰り返されて、「(11)界は心のみと彼らは知り、これに十一の有支を一心に〔依る〕(te cittamātra ti traibhātukam otaranti, api ca bhavāṅga iti dvādaśa ekacitte)」「(子)達(11)界依心有十一因縁亦復然」「(子)達於三界 但從貪心有 知十一因縁 在於一心中」とある。

同じく『華嚴經』の、夜摩天宮菩薩説偈品に見えるいわゆる「唯心偈」の第六偈に「心は工画師と同じ。心は〔五〕

蘊を造る。すなわち、世間界中にあるとあらゆる、これら世間は心の画くところなり」（影印北京版卷一八、一二七—三二一）。山口益訳、「仏教学文集、下」五九頁）、「心如工画師 能画諸世間 五蘊悉従生 無法而不造（大正一〇・一〇二 a 21）」「心如工画師 画種種五陰 一切世界中 無法而不造（大正九・四六五 c 26）」というも(2)と同一の意趣にいざるものであろう。その唯心偈の第八偈に「[あらゆるもの]が」心より生起する、そのありのままを仏は知りたもう（Yādīśāni cittatāntrāni tāni buddhah prajānāti,（山口還元）「若人（一）知心行 普造諸世間」「諸仏悉了知 一切從心転」とあるのも亦、同じ意趣を語る。

龍樹の『大乗二十頃』（G. Tucci : Minor Buddhist Texts, Rinsen Reprint P. 203）など、「あくやせただむのみ（Cittamātram idam sarvam）」という句も見える（施護訳「此一切唯心（大正二〇・二五六・2）」）。

(3)(4)につづれば、上記『華嚴經』唯心偈第七偈「心と等しきは仏なり。仏の如く趣（世間）はあるなり。〔されば〕心と仏と〔の〕は体性よりしては尽くることなし（山口訳）」「如心仏亦爾 如仏衆生然 心仏及衆生 是三無差別」や、第十偈「もし人、一切三時の、一切の勝者（jina）

を知らんと欲せば、一切仏を心の体性なる、法界（dharmaḥātu）において觀すべし（山口訳）」「若人欲了知 三世一切仏 応觀法界性 一切唯心造」「若人欲求知 三世一切仏 応當如是觀 心造諸如來」が、ただちに思い合われる。

『觀無量壽仏經』（大三六五）の中の「諸仏如來是法界身、遍入一切衆生心想中。是故汝等心想仏時、是心即是三十二相八十隨形好。是心作仏、是心是仏。諸仏正遍知海從心想生。是故應當一心繫念、諦觀彼仏・多陀阿伽度・阿羅呵・三藐三佛陀」（大正一一・三四三 a）という一節が(3)(4)と関連深いことは夙に指摘されている。

(5)については、『華嚴經』唯心偈の第九偈に、「身的なふものに（kayikesu）心せなし。心の中にも身的なるものあるにあらず（山口訳）」「心不住於身 身亦不住心」「心亦非是身 身亦非是心」と、ちょっと逆の意味の句が見出されることに注意せしめられる。

(9)については、『大智度論』卷八（大正二五・一八 a 2）に見える句「諸法如芭蕉 一切從心生」や、同じく卷五十一（四二四 a 3）に見える句「是三界虛誑如幻如夢、無明虛妄因緣故、有因果無有定実」、あるいは『大乘二十頃』の上掲の句にすぐ続いて見出される「〔すべては〕幻の」とく

生^ナ」(māyāvad utthitam, 施護訳「安立幻化相」)の句などが思ふ如わゆれる。

III

ひるがえって、初期経典の上に、右の般舟経の「心はやかの源泉をたずね得ないであらうか。

なによりもおまず、(2)について、ペーリ文『法句經』の卷頭の一偈が想起される。その両偈に共通な前半一句は「諸法は意に支配せられ、意によつて作られ(manopubbaṅgamā dhammā, mano-saṭṭhā mano-mayā)」であつて、よく知られてゐる。同趣旨の偈は『相應部』によ見られる——「世間は心に導かれ、心に牽き廻され。かくして心はよつただ」のものに従わわれ(cittena niyati loko, cittena parikisati, cittassa ekadhammassa sabbeva vasam anvagu, S i 39)」「心持世間去 心拘引世間 其心為一法 能制御世間 (大正11・11六四 a 26)」また、散文で同じ内容を説いたものとして『増支部』に「比丘よ、おほいに世間は心によつて導かれ、心によつて牽き廻され、生じた心に従わわれ(cittena kho bhikkhu loko niyatti, cittena parikissati, cittassa uppannassa vasam gacchati, A ii 177)」「比丘、心持世間去、心為染著、心起自在(大正11・七〇九 a 20)」が見られる。

(8)に関連しては、「誰^ハた方向に向けられた心をもつて、無明を破るであらう、明を生ずるであらう、涅槃を証するであらう、といふののとわりは無い。……正しい方向に向けられた心をもつて、無明を破るであらう、明を生ずるであらう、涅槃を証するであらう、ことわりばある(micchā panihitenā cittena avijjam bhecchati vijjam uppādassati nibbānam sacchikarissatī thānam etām thānam vijati. sammā panihitenā cittena avijjam bhecchati vijjam uppādassati nibbānam sacchikarissatī thānam etām thānam vijati.)」¹⁾と、經文が思ふ如わゆれるが、この一節を念む經(A I-5)自体が説くところ、「心の穢れ(ceto-paṭoda)」より死後悪趣に生まれ心の淨^カ(ceto-paṭāda)にゆき、死後天趣に生まれると、うりふる、衆生の心が本来光り輝く²⁾の(pabbhassara)である(すなわち心性本淨)といふこと、に帰するのであるから、般舟經の上掲(8)にそれを結びつけて考えるのは適切でないようである。

むしろ別な相應部經典(S XXXII-100, 雜11六七)に見える、これも名高い「心の汚れのゆゑに衆生は汚われ、心の淨^カゆゑに衆生は淨^カ(cittasampūkilesā sattā sampūkilesanti, cittavodāna sattā visujjhanti, S iii 151)」「心惱故衆生惱、心淨故衆生淨(大正11・六九〇二)」ふしき句の方が、思想的

より深くこの般舟經の文と関連すると思われる。むしろ相應部經典のこの句は維摩經に全くそのままの形で出るので、その方でより一層知られているし、婆沙論卷一四一(大正一七・七一一・二)、顯宗論卷五(大正一九・七九五・二⁷)など論書にも引かれているボジョレーなものである(cf. F. E. Lamotte: *L'Enseignement de Vimalakirti*, p. 52-53, p. 174)。この經にはこの句が三度重ねて現われるが、その最後には、あたかも縦師が種種な絵具を用いて様様な形を描くように無聞の凡夫は五蘊をくり返し引き起こす(abhinibbatento abhinibbateti, 雜二十六では、五蘊を如実知せず五蘊に染著し未來の五蘊を生ず)、と説かれているから、一方で先に挙げた華嚴經唯心偈の第六偈に(第一・二・三・五偈に)繋る」とになる。

(3)(6)に見える「心が仏を見る」という方は初期經典には現われないが、「法を見る者はわれ(仏)を見る。われを見る者は法を見る」と云う句(yo kho, Vakkhali, dhammam passati so man^p passati, yo man^p passati so dhammam passati, dhammam hi, Vakkhali, passanto man^p passati, man^p passato dhammam passati (S iii 120). 対応する漢訳(雜二十六五)にはこの句は見えぬ)が思い合わされる。(9)に見える無堅固、無堅、不実などの原語はおそらく

asāra であろう。初期經典のところの sāra、芭蕉が sāra の無いものの喻えとして挙げられてゐる(e.g. M i 233, S iv 167)ことが、先に挙げた智度論卷八の句に関連して、想起される。

(4)(5)(7)に相應する語句が初期經典には全く見出されないむしろ注意されるべきことであろう。

* すでに(諸法の)「無所從來」「無所從去」は般若經がしばしば説くところであり、「諸仏無來無去」の説も時には見出される(『大正新修大藏經索引』第三卷のそれらの項を参照)から、(1)はそれに由来すると見得るであろう。

* * パーリ經典の中で mano-maya の語が kāya を形容する詞として用いられるることは非常に多く、その場合は、今この場合と異った特殊な意味をもって使われている。

以上、般舟三昧經の一節をとりあげて、そこに見える言葉づかいと同一な、あるいは関連する、語句の用例を、他の大乘經論や、初期經典の中にかれこれさぐり求めて見たのは、そのような作業を経ることが、初期大乘經典の文文句句のゆきとどいた理解のために、どうしても必要であるとかねがね考えていることによる、一つの試行である。